

令和 2 年度事後評価 対象課題 年次評価結果一覧

課題名	期間	実施期間	研究代表者	所属	評価 <sup>1)</sup>	研究評価委員会 総合コメント <sup>1)</sup>
原子力事故時における近隣住民の 確実な初期内部被ばく線量の把握 に向けた包括的個人内部被ばくモ ニタリングの確立	平成 29 年 ～令和元年	3年	栗原 治	量子科学技 術研究開発 機構	B	福島事故での教訓を取り入れるため、地方自治体からの意見聴取をおこない、新しいモニタリングシステムの標準化を目指していただきたい。
					C	初期モニタリングのシステム確立は重要である。現時点での性能・使用状況等における新型検出器の優位性を明確化するとともに、新型検出器の開発に注力すべきである。
					B	昨年度の評価時点において遅れ気味と判断された新型検出器の製作と実証実験を最終年度に間に合わせたことは評価する。開発された装置を用いた甲状腺測定研修会での意見を反映させるなど、事故時の甲状腺モニタリング対象者側の視点に立った操作マニュアルについても報告書に記載されたい。
事故等緊急時における内部被ばく 線量迅速評価法の開発に関する 研究	平成 29 年 ～令和元年	3年	谷村 嘉彦	原子力研究 開発機構	B	現場で実際に利用できる実効的なシステムを構築することを期待する。
					B	測定器・測定手法の開発と言う点では順調に進んでいる。治具の設計においては、海外調査の情報、及び材料のヒトに対する安全性、精度の確保等にも配慮されたい。
					B	研究目標である甲状腺モニタリングシステムについては完成したと考えられるが、実用上の課題及びそれらへの対応等のソフト面での検討結果(治具の向き、測定体位、乳幼児対応、様々な方の意見のフィードバック)等についても報告書に記載されたい。

環境モニタリング線量計の現地校正に関する研究	平成 30 年 ～令和元年	2年	黒澤 忠弘	産業技術総合研究所	B	現場での機器校正は重要な課題のひとつである。精度とともに確度の確認ができるような工夫を期待する。
					B	高バックグラウンド線量率下でのモニタリングポストの現地校正が短時間で可能となった点は評価できる。不確かさの評価と校正定数の決め方の相違、今後の課題、及び一般的な活用に向けた提言を報告書に書き込まれたい。
放射線業務従事者に対する健康診断のあり方に関する検討	平成 30 年 ～令和元年	2年	山本 尚幸	原子力安全研究協会	B	長年手が付けられていなかった重要な課題である。調査結果を踏まえ、どのような結論、提案を行うか到達点を明らかにすべきである。健診のあり方に関する提言、提案に生かされることを期待する。
					B	放射線業務従事者に対する健康診断について、法規制に関係する課題に関するアンケート調査を含めて、一定の取り纏めが期待できる。さらに一步踏み込んだ「提言」を報告書に記載されたい。
染色体線量評価手法の標準化に向けた画像解析技術に関する調査研究	平成 30 年 ～令和元年	2年	數藤 由美子	量子科学技術研究開発機構	B	スケジュール通りに進捗している。標準化された染色体画像解析技術の適用対象を明確にすること、及び AI 技術については他分野の先行事例を取り入れることも検討されたい。
					A	AI を利用した染色体自動画像判定が短時間で実施できることを示すなど、重要な結果が得られており、研究は高く評価される。深層学習用の教師データを複数の専門家で検証するなど、次のステップに期待する。
円滑な規制運用のための水晶体の放射線防護に係るガイドラインの作成	令和元年	1年	横山 須美	藤田医科大学	B	ガイドラインを完成させた事は評価できる。医療分野はその他の分野とは放射線業務従事者の放射線防護に関する認識に大きな差があるため、医療従事者対象の「教育用マニュアル」ではなく、出来るだけ拘束力のある「ガイドライン」としてまとめられたい。特に、水晶体線量が高くなる医療従事者を特定し、それらの従事者に対する対応についても言及すべきである。

\* 評価基準： A：一層の推進を期待、B：現状通り実施、C：計画を修正して実施、D：中止すべき

1) 実施期間が3年の課題は、上から平成29年度、平成30年度、令和元年度の評価。

実施期間が2年の課題は、上から平成30年度、令和元年度の評価。